

一 小袖箆筒之事

長サ貳尺八寸、横貳尺八寸、高サ三尺六寸、引出し五ツ、外ひらきなるべし、
一句。箆筒之事

小袖たんすをことごとくくすかしにして、下に香爐を入、香をたけば、上迄通る様にまたる也、

〔皇都午睡三編上〕座敷廻り道具をいはゞ、京都第一にして、諸品器用にて立派なる事なり、箆筒佛

壇、戸棚の類ひ、戸障子、襖に至る迄、善美を盡せり、江戸は價も安けれど、都て手薄く、不斷澤山につ

かふには爲あしかるべし、略○中 大坂は見だめ不束にして、手丈夫なるを愛す、江都は又火早き土

地ゆゑ、諸道具共、其日々々の用を辨じる計りにて、飾の道具は見たくてもなき位なり、略○中 相應

の暮しの商人に、小袖箆筒一ツあらば極上なり、跡は皆背負ひ葛籠が、人數程あればよきと見え

たり、故に佛壇、金屏風、重。箆筒。などに、美を盡す事を好まず、京都は大に異なり、

〔大江俊光記〕元祿十三年六月十五日、亥刻計ニ、中西長左衛門ヨリ嫁女ノ道具來、略○中 小袖箆筒一

對、

〔守貞漫稿十八雜服附雜事〕嘉永二年印行、古風ト流布トヲ、相撲番附ニ擬スル、其流布ノ方、大關以下左

ノ如シ、略○中 薄煤ノ箆筒、ミ、僅ニ、ス、近年ハ白キヲ好

〔元祿五年〕萬買物調方記、諸工商人所付、い、る、は、分

た、大坂之分、たんすや、小袖、ま、ん、さ、い、ば、し、筋、同仕立、同金や市左衛門

〔江戸總鹿子新增大全七〕諸細工名物

箆筒、長持、小袖櫃類、小傳馬町壹丁目

此所家々にあり、中にも横丁成田や甚兵衛、尤細工勝てよし、此家の元祖久五郎、後に甚兵衛と云
しは、根元の細工人也、今其子孫相續して繁昌せり、